

関東大震災救護運動における 賀川豊彦と本所基督教産業青年会の 成立過程に関する一考察

山 崎 ハコネ

はじめに

1. 研究背景および研究目的

本研究は、賀川豊彦と本所基督教産業青年会（以下、産業青年会）が関東大震災救援を契機にどのような震災救護運動を展開していくのか、その活動を支えた青年たちやキリスト教団体等のかかわりの実態を明らかにすることである。筆者は従来この研究領域において賀川の活躍や考え方が中心課題として取り上げられる一方で、周辺のキリスト教団体の視点が付随的、あるいは従属的なもののように扱われて十分に議論されてこなかったことに疑問を抱いていた。この点を論ずるために本稿では、特に成立過程において深く関与していた四つのキリスト教団体に注目し考察を試みた。第一は「東京基督教青年会」（以下、東京YMCA）を中心とするYMCA団体である。産業青年会は、東京YMCAの「救護事業を機に賀川豊彦と山本邦之助の発意で開設した」（斎藤1980：180）という見解がある。しかし、先行研究では成立の過程についての解明が十分ではない。第二は興望館グループである。産業青年会は、興望館所有の「本所区松倉町2丁目62番地」の土地を無料で借りることができた。この背景にカナダ・メソジスト婦人伝道社団があり、当時興望館の経営主体であった外人部会の存在がある。なお外人部会の所属していた団体が日本キリスト教婦人矯風会（以下、婦人矯風会）であるため、一連のグループとして取り扱う。第三は震災直後に組織された「基督教震災救護団」である。東京YMCAや婦人矯風会もこの団体に加入していた。賀川の宗教講演会に関与している経緯から本研究の対象にあげたい。第四は賀川を中心とする「神戸イエス団」「イエスの友会」「本所イエス団」らで形成される「産業青年会」である。

本稿では第Ⅱ章において、産業青年会の成立過程に関与した四団体の概要を整理する。続いて第Ⅲ章で、それぞれの団体、事業がどのような経緯の中で直接的間接的に関与し、いかなる手続き等を踏んで構造化されていったのかを中心に検証する。第Ⅳ章では、賀川と産業青年会が本所でど

のような救護活動を展開したのか、その実態について考察する。とりわけ、賀川のセツルメント思想と実践が産業青年会（同志・同労者たち）にどのように継承されていったのかについて検証を行う。まとめで、キリスト教と社会福祉実践の関連性を明らかにしていくことが目的である。本稿はこのように賀川が創設に尽力した産業青年会が、協働したキリスト教団体とのつながりの中で、活動の独自性を育み、賀川のセツルメント思想を彼らなりに継承する基盤を作ったことを、産業青年会の成立過程の中に捉えようとする試みである。

2. 先行研究の課題

これまで賀川豊彦と関東大震災救護運動について取り上げられてきた論文は少ないとは言えない。杉山（2015）が指摘しているように、キリスト教セツルメントの中でも、賀川豊彦によって設立された産業青年会セツルメントは、「量質とも、東京で最大のセツルメントとなっている¹⁾」こともあり、先行研究が蓄積されてきている研究領域ともいえる。また、災害時の福祉支援体制が急がれる今日においても関東大震災救護における賀川豊彦と産業青年会の取り組みは先駆的である。藤沢（2018）は賀川の復興支援が「100年続く復興支援」と評価し、賀川が展開した産業青年会の復興支援活動の特徴として、賀川の先駆的な復興観・防災観が阪神淡路大震災や東日本大震災においても風化防止のために有用であることを検証している。その中で取り上げた「災害を忘れない仕掛け」が論じられている²⁾。しかしながら、賀川と産業青年会の成立過程に着眼した先行研究は少なく、見落とされてきている研究領域である。一方で、本稿においては、産業青年会の成立過程に深く関与した四つのキリスト教団体に注目し、新たに総合的な考察を試みるものである。このような先行論文を筆者はみていない。この成立過程を詳細に検証すれば震災救護活動における各団体の独自性、賀川からの独立性も明らかになる。

雨宮（1985；2005；2009）は、賀川の関東大震災救護活動に至る行動を実証的に記録し評価している。雨宮は、賀川が東京YMCAに協力する形で救護活動を始めたことと指摘し、アメリカ赤十字社からの天幕の用意等東京YMCAの協力があつたことをはじめ、賀川が地域の特性を生かしてIYMCAと名前をつけたことに言究している³⁾。しかし、賀川を中心に論じられていて土地の経緯などについては論じられていない。大里（1992；1993）は、産業青年会の創立計画が救護終了宣言ならびに東京YMCAの復興運動に入る1923年10月30日以降ではないかと指摘しており、YMCA

とのつながりによる成立に着目している⁴⁾。李（2017）は、賀川の社会福祉実践・思想が韓国に及ぼした影響について論じ、賀川の社会福祉実践の研究において救霊団、産業青年会、農民福音学校の活動について言究している。しかしながら、李はYMCAのつながりを東京YMCAのウェブページ資料を中心に産業青年会の設立過程を検証していた⁵⁾。この研究は産業青年会とYMCA、賀川の子ながりの全体像を明らかにすることは目指されていない。

以上のように設立の契機ひとつを取り上げても賀川目線で見える見方とYMCAとの見解の相違が見られる。また拠点地となった「本所区松倉町2丁目62番地」をどのような経緯で借りることになったのかについても同様である。これまで横山（1959）の伝記をはじめ、賀川に関する書物の多くが関東大震災救護活動地として「婦人矯風会外人部会の興望館の焼跡に」設置されたと事実を示すのみで、興望館の側面に光を当てたものは少ない。戒能（2015：172-179）は、「これまで記録において土地問題について言及されることはなかった」と指摘し、「本所基督教産業青年会の土地についての資料とメモ」を執筆している⁶⁾。しかし、本稿との関連で言えば、『興望館セツルメント七五年の歴史』では、興望館が所轄税務署に提出した「免税願書」の添付書類「理由書」全文と「見取り図」の全文を紹介したものの産業青年会への土地貸与に至る経緯は明らかにされていない。

杉山（2015：85-86）は、産業青年会の事業が東京YMCAの事業の一部であると述べ、後述の通り、産業青年会というセツルメントとしては奇異な名称こそが、東京YMCAとのつながりを示す点と追究している。だが土地に関しては「興望館の焼跡で救護活動を開始する」と表現するにとどまり、貸与の経緯は不明である⁷⁾。

震災救護運動における賀川と産業青年会の活動は、本所イエス団を生み、現在の日本キリスト教団東駒形教会へとつながっている。『四十年のめぐみ』（1965）、『日本基督教団東駒形教会七〇年史』（1993）では賀川が本所地域で救護活動を開始した日を「教会の創立日」としている。『続・雲のような証人たち—東駒形教会90年史』（2013）においては、「東駒形教会員記録（1923～2013）」が掲載されその創立記念日に賀川豊彦（入会1923年10月19日）に続いて木立義道（入会同日）、深田種嗣（入会同日）他十名が入会したとの記載がある⁸⁾。しかし、これは東駒形教会の認識であり、実態がそうであったとしても手続き上においてはYMCAの活動の一環であったとするならば、この日をどう位置づけていくかについては議

論の余地があるといえる。また、東京YMCAの見解とは異なるものであろう。いずれも互いの立ち位置によって見解の相違がみられる。関東大震災ならびに空襲で建物や資料が全て焼失し、あるいは百年を超える歴史の中で事実確認を行うことは一層難しい。しかし、関東大震災救護運動のために設立された産業青年会の成立過程にかかわったそれぞれの客観的立場から多角的に検証していくことは、賀川の活動ばかりではなく各団体の創生の物語とその後の展開を理解する上で、意味があると考ええる。

3. 研究の視点と研究方法

(1)研究期間

本研究においては、研究対象期間を1909年から1927年までとした。賀川は関東大震災救護運動を「神戸の仕事をそのままここへ持ってくる」という実践仮説に基づいて意図的に開始している⁹⁾。いわば賀川の原点となった救霊団事業から発展していく「神戸イエス団」と「イエスの友会」の活動を視野に置き、産業青年会事業の初期成立過程を賀川の活動渡米から帰国後の1927年までにおいて考察していくことにした。

(2)研究対象

産業青年会の成立過程に関連する次の団体を研究対象とした。第Ⅱ章で各概要を述べる。

- ① 東京YMCA
- ② 興望館
- ③ 基督教震災救護団
- ④ 本所基督教産業青年会（イエスの友会を中心に）

(3)研究方法

上記の各団体の関東大震災前後の動きに注目し、各事業主体がミッションとする教派、伝道の特徴や社会事業の内容などを整理する。また賀川を軸として本所基督教産業青年会の成立過程に関係した主要人物たちを対象に、組織の中での位置や求めていたもの、産業青年会の成立過程への関与の度合い、賀川のセツルメント思想と実践の産業青年会の同志・同労者たちへの継承のあり方について考察を行いたい。

研究とする史資料は、「東京基督教会『大正十二年九月起』と明記された「理事会記録」（全頁）原資料の写しをはじめ、当時の資料である『大正十三年一月本所基督教産業青年会事業概況』、『大正十三年度本所基督教産業青年会事業報告』、『大正十三年四月本所基督教産業青年会設立趣旨』、興望館資料室所蔵の*Kobokan* “*Door of Hope*”他未発表資料である。産

業青年会の実態把握のために、『深田種嗣日誌』、『本所基督教産業青年会庶務日誌』を中心に考察した。その資料として戒能（2012；2013）「深田種嗣『宗教部日誌』①校訂・解題」、同著②、戒能（2014）「資料『本所基督教産業青年会庶務日誌』①校訂・解題」、同著②を用いた。また、『賀川豊彦全集』全24巻（キリスト教新聞社）を含めて賀川が書いた日記、書簡、論文、『年史』や歴史資料、史資料や関係文献にあたり、実証的に検証を試みた。史資料には現代の価値観において不適切な用語や差別用語が含まれている場合もあるが、本論では原文そのままを使用している。

I. 本所基督教産業青年会成立に関与したキリスト教団体の概要 （震災前の動向）

1. 東京基督教青年会（東京YMCA）

(1)創立：東京YMCAは1880年5月8日、日本基督一致京橋教会において発会式が挙げられた。創立にかかわった若者たちは20代で、キリスト教を基盤としながらも宗教の違いを超えた「超教派」の組織である。YMCAは1844年英国で誕生し、創立者はジョージ・ウィリアムである。東京YMCAは、英語教育、職業教育、体育事業、野外事業等を展開した。

(2)使命：「イエス・キリストに示された愛と奉仕の精神に基づいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し公正で平和の世界をつくるために運動を展開する¹⁰⁾」

(3)東京YMCA江東支部の震災前の動向

震災前の1922年、東京YMCA江東支部は閉鎖に追い込まれた。開設は1919年12月で、工場で働く青年や市民を対象に①夜学校（英語・工業科）、②水曜講演会、③金曜懇談会と聖書研究、④讚美歌講習会、⑤音楽会、⑥少年のための土曜例会と、地域に出向き地域の課題を地域において対処する社会教育的事業を進めたが、3年で閉鎖となった¹¹⁾。

2. 興望館グループ

(1)創立：興望館は、カナダ・アメリカから来た婦人矯風会外人部会有志により組織された。乳幼児死亡率の最も高い地域である本所松倉町において託児、授産、診療所等のセツルメントを1919年5月に開設した。

(2)矯風会—外人部会：日本キリスト教婦人矯風会は世界キリスト教婦人禁酒同盟（WCTU）の影響を受けて、1886年12月6日に東京婦人矯風会として設立され、後に1893年、全国組織となった。矯風会はキリスト教精

神に基づいた女子教育、女性の様々な問題の解決と社会改良をめざして活動を行う組織である。婦人宣教師や宣教師夫人を中心とした在日本西洋婦人矯風会が矯風会の一部会として1917年1月に組織された。世界的にも、国内的にも、所属教会、教派を超えた超教派の婦人活動団体である。

(3)興望館の震災前の動向

興望館は内務省、東京府、東京市、本所区からの六万円の補助等を受け、託児所、勉強室、裁縫室、読書室、診療室、産室、浴場、洗濯場等の配置による新築工事を1923年8月31日に完成させた。翌日の献式を終えた直後に、「午前11時58分関東大震災に遭い全焼し、工事費六万円共々一瞬にして灰燼に帰してしまった。残ったのは四万円の負債だけであった」¹²⁾。

3. イエスの友会

(1)創立：イエスの友会は1921年10月5日に発足した。この日に奈良の旅館菊水楼で日本基督教会教職者の修養会が開催され、14名の教職者が集った。第二部の懇談会の席上で賀川は新しい宗教運動を起こすべきと発言し、「ひとつの団体を結成することになった」(横山、1959:172-173)。この会は教職、信徒を問わず、イエスの友会の要綱を遵奉する者は誰でも会員となることができるというもので、超教派の性格を持って始められた。

(2)イエスの友会綱要

要綱は賀川が提案し前述の修養会で満場一致で承認された。それは、① イエスにありて敬虔なること、② 貧しき者の友となりて労働すること、③ 世界平和のために努力すること、④ 純潔なる生活を尊ぶこと、⑤ 社会奉仕を旨とするものの5つでキリストの同志の会として誕生した。

(3)イエスの友会の震災前の動向

イエスの友会第1回全国大会・夏季修養会が震災前の1923年8月25日から29日まで、御殿場にある東山荘で開かれた。参加者は43名、講師は4名であった。その研修会で行われた賀川の連続講演「ヨブ記の研究」は、「ヨブ記の感激が原動力をなした¹³⁾」と言われるほどに大震災救護活動の実践・行動に移されることとなった。

「ヨブは五つの大厄災を受けたが、その苦悩を乗り越えて神を信じた。神は二度も大風の中からヨブに語られた。『腰をひきからげて丈夫の如くなれ』(ヨブ記36:40)。宇宙悪に勝つことは偉丈夫の如く戦うことだ。悪に勝つのは思想ではなく行動である。理論ではなく実行である。我らもヨブの如く前に向かって猛進しよう」(雨宮1985:14)

Ⅱ. 本所基督教産業青年会の成立過程をめぐって

1. 東京YMCAと本所基督教産業青年会（設立・組織）

賀川は関東大震災発生を9月2日に知った。同日の正午には神戸YMCAで「神戸市基督教連盟団体」代表者60名と協議し、9月4日には現地東京に着き被害状況を確認している。翌5日に神田美土代町の東京YMCA（焼跡地）で石田友治と会い、同職場の総主事山本邦之助らと共に東京の救護・復興ために話し合い、祈りをともにしていた。この時のことを斎藤（1980：176、2010：86）は、賀川の助力によって東京YMCAの「総合的救護本部」（①総務部、②天幕部、③宗教部、④配給部、⑤収容部、⑥避難民輸送部、⑦教育部）が設置されるに至ったと評価している。また、同月7日、14日と東京YMCAに集まり、教会・教派を超えた「基督教震災救護団」が結成されていった。委員長小崎弘道のもと総務部、社会部、児童部、教会部、伝道部の5委員会に分かれ、ここでも総合的、組織的な救護運動のネットワーク化が広がっていた。東京YMCAの山本邦之助は社会部の担当となり、事務局も東京YMCAに置かれた。これは、賀川の影響によるものと推察される。この団体については次の「基督教救護団（寄付・財政支援）」で論じたい。

総主事山本邦之助は、東京YMCA理事会で「九月三日以来着手せる救護事業に付き報告」（9月27日）をしている。そして、10月16日の理事会において第2号議案「救護及び新社会事業着手の件」を山本は説明している。前出の理事会記録には「今後新なる方針により着手すべき青年会ハット（おそらくホット事業のことであろう 注筆者）事業に付き主事説明する所あり、可決」と記録されている。産業青年会は東京YMCAの「救護及び新社会事業」構想のもとで着手することを審議し、「可決」という正式な手続きを踏んで決定されていた。斎藤（1980：180）は「賀川と山本の発意」で産業青年会構想が具現化されたことを指摘している¹⁴⁾。

一方で、理事決議を待つまでもなく同日、賀川と青年たち（深田種嗣、木立義道、薄葉信吾）3名の神戸イエス団と神戸YMCAのメンバー（奥村、佐藤、カンバース）たちは長崎丸（11時発）に乗り合わせていた¹⁵⁾。18日の午後、賀川らは被害の最も大きかった本所深川方面を視察している。賀川は、本所被服廠跡の光景を見て「すぐ、山本邦之助氏と相談して本所にキリスト教産業青年会を新しく起こすことを決めた」と語っている。翌19日には、興望館跡地を借りられて本所での活動を始めている¹⁶⁾。本所深川方面は、工業地帯で働く労働者居住区であるとともに、東京YMCAの江東支部が閉鎖となった地域であった。賀川がYMCAの働きをどこまで助け

ようとしていたかは不明であるが、前述のとおり産業（INDUSTRIAL）を加えた「本所基督教産業青年会」（I.Y.M.C.A）の名のとおり、YMCAを意識して創設したのであろう。

東京YMCAの救護および新社会事業としての期間はわずか5カ月と短い。前出の東京YMCA理事会記録によると、東京YMCAの救護事業終了が11月5日の理事会で報告されたと同時に、その後の計画・経営の一切が日本YMCAの復興部に一任されるという方針が打ち出されて承認された。東京YMCAの理事会の動きは急展開し、12月6日の理事会で山本邦之助の辞任申出の件が議案にあがり、承認されている。斎藤（1980：182）は山本が「辞職を余儀なくされた」と述べている。続いて産業青年会に対しても12月29日、1924年1月22日、2月19日の3回の理事会を経て「本所産業青年会独立に関する決議に対し復興部役員会の決議は先の通りなり」とあり、独立が決定された。記載内容は次のとおりである。

一松倉町事業に関する件

東京青年会より申出られたるに対し現在の本所基督教産業青年会なる名称を紛らわしからざるものに変更する条件の下に建物設備一切を賀川豊彦氏に譲与するとし且つ該事業創始依頼同氏功勞に対し深甚の謝意を表す事とする。右を賀川氏に通帳すること尚經常費支出の件は財政上の都合により見合わせることにす。（東京基督教青年會（1923『理事會記録』大正拾貳年九月起 1924年2月16日付）

上記により産業青年会は、1924年3月までは東京YMCAの委託事業として運営された。同年4月1日より同会は賀川豊彦を理事長とする新組織として再スタートを切ることになった。要因には救護活動に関する認識の問題、経営上の問題があったと考えられる。なぜなら、『本所基督教産業青年会概況』（以下『概況』）には、1923年10月19日から12月末までの収支計算表が報告されている。収入合計7,669円32銭の内、8割以上が賀川の講演会・献金と寄付金で、そのうち、東京YMCAからの計上額は12月末現在で433円58銭であった。12月末現在の支出合計額は7,163円11銭に至り、支出の多くが設備費、給与手当で、給与手当だけでも、1,506円で東京YMCAの収入の3倍強の出費であった。次月への運営資金が506円21銭しか残っていないという不健全な会計状況にあったことが明らかになった。賀川の証言によれば「その後私は、東京YMCAの会計を顧慮して独立した」とある。しかし「山本邦之助氏の好意は続いた」と賀川が言うよ

うに、山本邦之助、石田友治、荒川哲次郎の3名は理事として産業青年会の運営に携わり、青年たちの指導にあっていた。前出の『宗教部日誌』、『本所基督教産業青年会庶務日誌』においてもそれを確認することができた。賀川も同様で、東京YMCAとのつながりを重視し、毎日曜日の午前6時半早天祈祷会、宗教講演会、「震災記念早天祈祷会」（毎年）等を担当した。それに伴いイエスの友会員、産業青年会員の出席もあり、互いに独立後も連携しあい、良き協働体制にあった関係団体と言えるだろう。

2. 基督教震災救護団（寄付・財政支援）

賀川の震災救護運動構想には、教会、教派を超えた「総合性」、「ネットワーク性」がみられる。震災直後、キリスト教を軸とした諸教会、諸団体が震災救護を目的として1923年9月14日東京YMCAに集合した。そこで結成されたのが「基督教震災救護団」（以下救護団）である。組織としては、霊南坂教会の小崎弘道が同団委員長兼総務部長で、総務部、社会部、児童部、教会部、伝道部に分かれ、20名の実行委員会によって組織された。賀川は後に「訓練された組織的救護活動が行われた」と評価している。救護団の働きに「賀川と産業青年会」への財政的支援がある。それは賀川という人材を活かした資金循環のしくみで、前出の『概況』に次のような支援策が提示されている。

これより先賀川氏は基督教震災救護団の依頼に依り、市内の焼残れる教会に伝道することになったが、その講演会に於ける入場料及び献金を同氏の救済運動に使用することとなり、全部を産業青年会に寄付された。

（『大正十三年本所基督教産業青年会事業概況』12-13 下線筆者）

救護団は、キリスト教のネットワークを活かして、東京市内の焼け残った教会で「賀川氏講演会」を実施した。前出の『概況』の収支報告（1923年の10月19日から12月末日まで）によれば、参加教会は27教会（学校含む）あり、献金合計額は「2,200,180円」と計上されていた。それは全収入の約3割にあたり、定期的な収入が見込める性格を有していた。前出の『宗教部日誌』をみると、賀川は宗教講演会（礼拝説教含む）を10月21日から同月末の11日間で14回、12月1ヶ月間で30回と、ほぼ毎日講演に出かけていたことが確認できた。特に12月25日の日比谷公園における早天讃美礼拝（6時開始）は市民クリスマスとして企画・運営されていた。深田日

誌には「木立兄は二十五日の日比谷公園における早天讚美礼拝のため奔走」(同月17日)、「午後YMCAと救護団へ木立兄と二人でいく」(同月23日)の記録が見られた。当日は、「小崎道雄氏司会、賀川先生、木村先生奨励、中田羽後指揮、会衆四百十名」の報告があるとおりに、市民クリスマスはネットワークを活かした企画で盛況に終わった。

以上のことから、「講演会における入場料及び献金を同氏の救護運動に使用する」支援策は、産業青年会の活動を支える仕組みとなって実現した。同様にそこには、賀川たちが震災救護運動を展開できる「場」や「人とのつながり」が形成されるところのキリスト教のよき協働環境があったことを確認できる。

3. 興望館所有「本所松倉町2丁目62番地」の土地をめぐる

次に興望館跡地の土地貸与に至る経緯を検証していきたい。

興望館の土地をめぐる未確認な点は、だれがどのように関与し貸与の実現に至ったかである。未公開の興望館所蔵「20周年誌英文タイプ第1稿 *Kobokan "Door of Hope"* (瀬川和雄編) 資料がある。その「復興」という記事の中に「Mr. Arakawa」の名があった。東京YMCAの主事荒川鉄次郎である。前述の既に閉鎖していた東京YMCA江東支部(1919年12月7日開設)主任として着任した。当時の荒川は隣接していた興望館建設のために補助金等資金集めに協力し、興望館理事らとも接触していた。「荒川氏によって建設が始まった」という記録も見つかった¹⁷⁾。

さらに、東京YMCAの荒川が産業青年会の活動を進める上でバラック建設地として「興望館の土地を使ってはどうか」という提案を賀川にしていたという経緯が以下の資料から発見することができた。

The Industrial Y.M.C.A called Dr. Toyohiko Kagawa from Kobe to help in the reconstruction to Tokyo. Mr. Arakawa probably proposed to use the Kobokan land for a barracks to house Dr. Kagawa's work, for which the City would give lumber: And Dr. Kagawa proposal to secure lumber also for a barracks 7 x 4 ken for the Kobokan work if the latter would raise ¥100,000 immediately to pay for labor and other expenses of the building. This was contributed by the Friends Mission and a contract for use of the land by the Industrial Y.M.C.A. for two years was signed and a Joint Committee from the Y.M.C.A. and Kobokan - two each was appointed. Our member were Mrs. Cunningham and Miss Blackmore. A division of responsibility for the work was agreed upon, our

allotment being Day Nursery, Kindergarten, Primary, Sunday School children under 8 years of age, and district nurses. The two institutions used the Kobokan lot from December 1, 1923 to November 1927(?) when Dr. Kagawa removed to a new building in the neighborhood. (p.6)

上記資料で繰り返し強調されていることは、興望館とYMCAとの関係であり、産業青年会（The Industrial Y.M.C.A.）と興望館との間に2年間の「土地使用契約」が結ばれていたことも確認できる。興望館の土地の賃借をめぐっては幾つかの要因が考えられる。東京YMCAという組織や人的つながり、「東京市が木材を提供すると申し出た」とあるように行政の了承、仲介¹⁸⁾もあって成立に至ったと推測される。しかし、主要因は興望館代表理事イザベル・S・ブラックモア（Isabella S. Blackmore）の英断にあったのではないだろうか。

震災後、興望館の経営主体は在日本カナダ・メソジスト婦人宣教師社団に変更された。ミス・ブラックモアは当時の宣教師社団総理の地位にあり、私立東洋英和女学校長を務め、興望館の代表理事でもあった。婦人宣教師社団の本部も東洋英和女学校に置かれていた。カナダ・メソジスト宣教師社団は、伝道、教育、保育の諸事業および社会事業を行っていた。ミス・ブラックモアはその実践者で、彼女は1889（明治22）年8月27日に教育宣教師として来日し、同年東洋英和女学校の英語教師に就任した。以後東洋英和女学校校長、山梨英和女学校校長、1918年には東京女子大学を設立し初代理事長に就任、と日本における教育者として重要な働きをなした一人である。一方でミス・ブラックモアは貧しく身売りされる子供を引き取ったことを機に、永坂孤女院を設立し運営に携わった。また本所のスラム地域松倉町に興望館セツルメントを設立するために「彼女の蓄財の大部分である五千八百圓を奉仕の祭壇の前に」と率先して興望館事業に寄付した。興望館は竣工直後に震災で全焼したが、これにも屈せず、事後処理、再建事業経営に粉骨砕身しピューリタン信仰に立って教育、社会事業に尽力した人物である。

以上のように宣教師社団の日本伝道の中心人物であり、興望館、永坂孤女院の設立、経営に携わってきたブラックモアであったからこそ、復興のために神戸からきた賀川豊彦をはじめとする本所基督教産業青年会の土地使用目的を「我が社団の目的と同一にして」と理解し、2年の無料貸与という英断を下したのだと思われる。理由書には「伝道の目的を達せんが為めイエス団なるものを組織し、其の伝道を行いつつあり。日曜日には、

(中略) 児童幼児に宗教教育を施しつつあり。又一助として労働者の無料職業紹介及労働者実費診療所を設け¹⁹⁾とあるように産業青年会のセツルメントと興望館のめざすキリスト教セツルメントの方向性、あるいは関東震災救護活動の目的も同じと受取られたものと推測される。

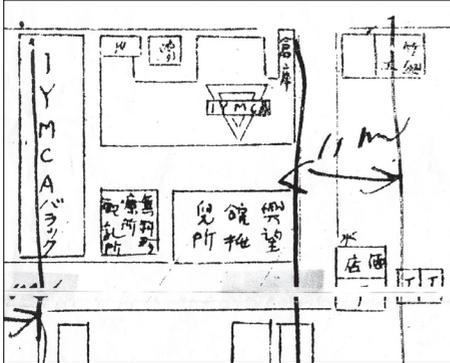


図1 興望館資料室所蔵「位置図」

興望館の資料室の中で、興望館資料室所蔵のA3サイズ手書き「位置図」(写し、未公開資料)をみつけることができた。図1のとおりで、YMCAのロゴマーク入りのIYMCAと興望館託児所、無料診療所・配乳所、IYMCAバラックの4つの場所の位置が書かれたものであった。当時の興望館関係者が「松倉町産業青年会」と呼び、YMCAの

一部であるI.Y.M.C.A.と理解していたことを示す一史料と言えらるだろう。

土地以外では興望館の事業(一時保育、託児所等)と重ならないように産業青年会の事業展開がなされていた。両者のつながりは、初期に於いてよく見られた。特にバラックでの最初のクリスマス(1923年12月)との協働においてである。「賀川博士の指導とインスピレーションのもと、Kobokanでお世話を受けた子供たちは本当に幸せだと誰もが思った。Kobokanでは賀川博士の導きによって、だれもがこの機会にキリストの霊の祝福を受けた」と喜びの記事が1頁に及んで紙面を割いていた。また、互いが隣接していた関係から食事や感謝会などの交流がみられ、協力関係にあったことを確認できた。

4. イエスの友会員の参加と協働(人材・実践力)

産業青年会は、東京YMCAを母体、支部として創立した。前出の「大正13年度1月I.Y.M.C.A.『本所基督教産業青年会事業報告』」は、YMCAの会計から支出されているという見方もある²⁰⁾。成立初期の時点では大正13年1月の事業報告書に記載されているとおり設立の目的、事業も東京YMCAの事業に準じて始められたものであろう。当初賀川は名誉主事で、責任者に主事荒川哲次郎が配置されていた。荒川は江東支部時代からの救護活動への理解者・適任者として産業青年会設立の主要な人物の一人

となった。事業内容も①宗教部、②教育部、③調査部、④社会事業部、⑤無料診療所・児童健康相談所、⑥牛乳配給所、⑦児童栄養給与、⑧体育部、⑨低金利事業資金貸金、⑩組合事業部、⑪その他事業イ無料宿泊所、ロ巡回看護婦の養成、ハ独身寄宿舎であった²¹⁾。

しかし、どのような実態であったのが重要である。雨宮（2006：68）は、上記事業を展開できた要因に賀川の良き協力者・同労者のイエスの友会員の存在を指摘している。賀川純基も「終始彼（賀川）の周辺の背後にあって一緒に働き、また援けた人達の群れである」とイエスの友会のことを語っている。賀川も「平素より比較的訓練を多くもっていた」イエスの友会の人材とその実践力を頼もしく思って期待を寄せていたと思われる²²⁾。震災後直ちにイエスの友会の同志石田友治に会っていたことも無関係ではないであろう。石田友治は、次のように報告している。

「八月の修養会と震災とによって刺激されて、九月十日前後に、会員の有志が東京基督教青年会に集まり、同会の救護事業に加わって献身的に祈り自ら働いた。毎日曜日には早天祈祷会に二三十人の同志が集まり…東京基督教青年会の慰問部に加わって働くようになった。」
（『イエスの友月報』9号巻頭言。下線筆者）

イエスの友会有志は、1923年9月5日以後、東京YMCAの救護事業の慰問部に加わって各教会の会員らと協働して奉仕していたことがわかる。「毎日曜日」にと記載があるように会員の活動は、仕事・勤務時間以外の朝の時間、夕方、休日の時間と私的時間に身を置いて奉仕・実践していた。震災救護事業が一段落した後は「その精神が路傍伝道に発展した」と石田が述べているように、産業青年会の開始日の夜もイエスの友会は路傍伝道を実践していた。深田種嗣は、初日の夜からイエスの友会の路傍伝道隊に加わっていた。翌20日からは木立義道、薄葉信吾も路傍伝道に参加していた²³⁾。深田と木立は、イエスの友会修養会準備委員であり参加者であったことから、路傍伝道隊に参加しやすい環境にあったと言えよう。

一例であるが『宗教部日誌』に記された10月28日の活動を追ってみると、a. 午前6時、東京YMCA焼跡にて礼拝、（賀川説教、イエスの友会員約40名出席）b. 午前9時から松倉町日曜学校（イエスの友会員4名日曜学校教師として奉仕）。c. 午後、錦糸掘日曜学校（イエスの友会員4名日曜学校教師）。d. 午後、被服廠跡で路傍伝道隊（イエスの友会員・薄葉）。e. 午後6時松倉バラックにて精神講和会開催。a～eのいずれ

もイエスの友会の有志に助けられての活動内容であった。同日の『宗教部日誌』には続きがあり、イエスの友会は賀川の働きをもサポートしていた。a. 東京YMCA朝拝、f. 巣鴨教会で礼拝説教、g. 夜7時から同教会において宗教講演会「イエスと弟子との関係」（聴衆千人）においてイエスの友会有志が出席し、講演会の演題や出席者数、決心者数等の記録をとっていた。『イエスの友月報』第6号の東京支部報告によれば、「いつも村島兄、菊池姉、今井姉などが筆記してくださっていますので」とあり、その原稿が『雲の柱』に載せられる、あるいは「賀川の言動と密接な連携をもつ会況を報じていく」など機関誌の記事として掲載されていくという流れが形成されていたようである。

賀川と産業青年会が関東大震災救護運動を始めていくにあたり、スタート時点からその事業が産業青年会の事業であるのか、イエスの友会の実践であるのか、区分できないほど絡み合っている両者の協働実践こそが産業青年会の事業を創りだしていったものと考えられる。

今井よねは、イエスの友会について「産業青年会よりも運動が事業化していないだけ」と両者を認識していた。彼女は両者の立場に身を置いて活動をしていた。イエスの友会という賀川が頼もしく期待を寄せていた豊かな人的資源、信仰的協働体制の中で産業青年会の救護活動が展開されていたといえるであろう。

Ⅲ. 賀川豊彦と本所基督教産業青年会

1. 本所基督教産業青年会の事業運営

(1) 深田種嗣の『宗教部日誌』からみた本所基督教産業青年会

深田（当時23歳）は、関東大震災後の賀川の動きを直接みてきた神戸イエス団の青年である。産業青年会では、宗教部の責任者であり、賀川の秘書兼助手のような役割を担って、委員会や市や府にも行くことがあった。

『宗教部日誌』は1923年10月19日に始まり翌1924年1月26日で終わっている。平日の日誌には、当日の賀川の伝道記録と産業青年会の日中の様子、夜の路傍伝道、イエスの友会の集会、日曜日は両者の伝道記録が並行して書き留められていた。（担当、出席者名が残されてあった）

開設最初の日曜日（1923年10月21日）は、朝6時に東京YMCAで礼拝と宗教講演に始まり、9時に日曜学校（松倉町10月21日開校、午後2時日曜学校錦糸堀は、10月28日開校）、続いて路傍伝道、夜7時には伝道説教会が行われた。

11月11日（日）から明治学院神学部学生3名が参加していた。夜7時から

(2)『本所基督教産業青年会庶務日誌』からみた本所基督教産業青年会

『本所基督教産業青年会庶務日誌』は、庶務部主任今井よねによって1924年10月19日～6月2日までを、主事木立義道によって1925年10月19日～9月21日（中断）、1927年6月1日～9月14日まで記載された。日誌には主事会の各部会報告や行事予告、協議事項をはじめ理事会決議録の記載をみることができる。この間に産業青年会は財政的危機に二度直面した。日誌を中心に木立以下の職員たちがどのように考え、自分たちなりに決断し事業を進めていったのか、その過程を考察したい。

第1の危機は賀川が全米大学連盟の招きで渡米し帰国するまでの期間である。渡米前の1925年11月10日の主事会で賀川の方針書が読まれた。会計上の決定事項として賀川は①「診療部は独立のこと」、②「不在時の会計を「木立氏に一任」すること、③「本會會計不可能となるときは、賀川氏その責任を負う」とし、月1千円を目途に経営するよう指示を出した。独立後の産業青年会会計は賀川の個人経営に移り、一部の公費補助金収入があるとはいえ、賀川は絶えず資金不足に追われていた。賀川は自らの宗教講演料、原稿料の収入をもって産業青年会の財政を支えてきた。しかし、一個人が担う額には限界があったと言える。賀川の書（1905：322,330,331）には資金に苦勞している記述が多い。その主因が診療部の薬代で、そのために賀川は「アカペラ御殿に閉じこもり」、「神戸の無料診療所と東京本所の無料診療所の二つを継続している間は無理をしてでも筆を休めることができなかつた」と述べている。戒能（2012：62）作成の「関東大震災と賀川豊彦（執筆一覧）」の表²⁶⁾によれば、1924年6月に7本の執筆、7月には4本と驚異的に集中して書いていた。その原稿料が薬代に一瞬にして消えていくということを賀川は味わっていた。不在中においては、それを担いうる方法が見いだせなかつたのであろう。

同年11月12日の日誌を見ると木立は、賀川不在中の会計を見直していた。それによると、1923年11月から1924年9月間の経常費は月2,600円であったことから、賀川案は月半額以下の削減を示すものであった。このため翌年1月12日に職員総会（8名出席）が開かれた。木立は「今後どういう方法で働くかという具体的な方法について、ご意見を伺いたい」と自分たちの立場で考えることを求め、個々の意見を述べるができるよう話し合っていた。記録は3頁の量となり、「昼は外で働く」方向が示されるも、同月18日の理事会においても解決の糸口を見いだせない状況にあった²⁷⁾。産業青年会は再度、20日夜に職員会を開催（出席者15名）し、そこで「各自仕事に就くこと」で4名が残り、青年会のために専念することを自分

たちの総意で決断を下した。3月31日付の日記には玄関当番表²⁸⁾の記載が残っていた。昼間は各自働きに出て、産業青年会の仕事は夜間に行い、得た収入をすべて会計に入れて、必要なときだけ小遣いとしてもらうという神戸イエス団と同じ方法をとって産業青年会の危機を切り抜けたのである。彼らは3月3日に感謝会としての懇親会を開いていた。出席者はイエス団15名、イエスの友会5名、産業青年会10名の30名が集まった。この三者の協働の実態こそが、産業青年会の成立過程の中で生まれてきた関係性であり特徴である。

第2の危機は1927年6月に起こった。賀川から信書が届き、それには「理事長個人にて経営的負担に堪え兼ねるを以てこの際、本会を東京基督教會又は興業館其の他に経営を譲りたし²⁹⁾」と明記されてあった。木立は「本会を他の団体に引き渡すが如きは」(中略)「事業執行権を現在の従事員に譲り」、「従事員一同背水の陣を布き、最後の奮闘をしてみようと決意した」(6月16日)と職員総意を理事会で発言している。結果として、同月27日に賀川同席のもとで職員会議、理事会が開催されて継続が決定となり、事業の整理、会員募集(資金集め)と理事・職員が結束して危機に立ち向かっていた。賀川の介入は個人経営的な基盤の脆弱さを示すと同時に、賀川に依存した組織の中でむしろ木立ら産業青年会一人ひとりの自立や覚悟、主体性が発揮される場へと変革され、やがて賀川のセツルメント思想が継承されて、次につながる転機となって前進したと言えるだろう。

IV. まとめと今後の課題

本研究において以下のことが明らかになった。

(1)産業青年会(IYMCA)の名称が示唆するように、始まりは、東京YMCAを「母体」として「支部の形に於て創立」した。同YMCAは1923年10月16日の理事会で「救護及び新社会事業の件」として審議し「可決」のプロセスを踏んで事業を開始した。その期間は1924年3月までで、「大正13年4月本所基督教産業青年会設立趣旨」案内には理事8名主事6名(8部2名兼務)組織³⁰⁾で再スタートしていた。山本邦之助、荒川哲次郎、石田友治は理事として産業青年会の事業運営に携わっていた。切れ目のない事業運営が却って、産業青年会成立の経緯の曖昧化につながったのであろう。

(2)基督教震災救護団は横のネットワークを活かして、東京市内の各教会において賀川の宗教講演会を企画し、入場料・献金を救護運動に使用する

という支援策をもって、初期の産業青年会の財政支援を継続した。

(3)興望館の土地の貸与は、当時の興望館理事らと接触のあった荒川哲次郎が「興望館の土地を使ってはどうか」と賀川に提案していたことが判明した。興望館所蔵の「A3サイズ手書きの位置図」からも東京YMCAの影響が大きいことが明らかになった。しかし、土地貸与に至る主要因は興望館代表理事のミス・ブラックモアの信仰による英断であろう³¹⁾。

(4)関東大震災救護運動における賀川と産業青年会の働きは、イエスの友会の協働がなければ「質量とも、東京で最大のセトルメントとなっている」との評価には至らなかったであろう。産業青年会の事業であるのか、イエスの友会の実践であるのか区分できないほど絡み合った協働による実態が産業青年会の事業を創り出していたと言える。

(5)4つのキリスト教団体はいずれも超教派で全国規模、世界ともつながるキリスト教を軸としたネットワークをもっていた。セトルメント機能という点においても、東京YMCAの江東支部、興望館の松倉町、産業青年会の「本所」と意図的にセトルメントを必要とした地域に入ってキリスト教を基盤とする宗教部を中心に実践を展開していた。賀川の経営方針の中で「本会を東京基督教青年会又は興望館其の他に譲りたし」と提示するほどに、それら団体組織への信頼度を読み取ることができるのではないだろうか。

(6)賀川と産業青年会の震災救護運動は成立過程に見るようにキリスト教を基盤とした「大きな協同作業」「隣人会組織」のように構造化して救護動に取り組んでいた。賀川の「良い友達さへ集まって来るならば、何處にでもセトルメントは立派に出来る」を裏付ける実践と言える。

(7)賀川のセトルメント運動の果たした役割の一つは、本所に住み込み、人格の交わりを通して深田や木立が自らの生き方を見出していったように、人格教育であり主体形成に貢献した、と言えるのではないだろうか。

今後の課題

本研究では、産業青年会の成立過程の実態を知るために多角的に検証を行った。残された課題は、賀川豊彦のキリスト教社会福祉実践に貫かれていくセトルメント思想の全体像を明らかにすることである。

註

- 1) 杉山博昭 (2015) 『「地方」の実践からみた日本キリスト教社会福祉』 ミネルヴァ書房, 86頁。
- 2) 藤沢真理子 (2018) 「賀川豊彦と関東大震災—100年続く復興支援」『東邦学誌』第47巻第2号, 15-32。
- 3) 兩宮栄一 (1985) 「関東大震災と賀川豊彦」『賀川豊彦研究』第89号, 17頁。
- 4) 大里知子 (1933) 「賀川豊彦とセツルメント運動(1)」『賀川研究』第23号, 3頁。
- 5) 李善恵 (2017) 『賀川豊彦の社会福祉実践と思想が韓国に与えた影響とは何か』 ミネルヴァ書房, 102-103頁。
- 6) 戒能信生 (2015) 「本所基督教産業青年会の土地について資料とメモ」『賀川豊彦研究』63合併号, 172-179。
- 7) 前掲書86頁。
- 8) 日本基督教団東駒形教会 (2013) 『続・雲のような証人たち—東駒形教会90年史』日本基督教団東駒形教会, L-74。
- 9) 賀川豊彦 (1974) 「焦土の彩色せんとして」『賀川豊彦全集21』キリスト教新聞社, 301頁。
- 10) 東京YMCAホームページのうち、「東京YMVAの使命」を抜粋した。
- 11) 前掲書154-155頁。
- 12) 興望館創立75周年記念誌編集委員会 (1995) 『興望館創立75年の歴史』社会福祉法人興望館, 20頁。
- 13) 『イエスの友会報』第2号8頁。『イエスの友会月報』、『イエスの友会報』の記載あり。
- 14) 前掲書193頁。
- 15) 横山春一 (1959) 『賀川豊彦伝』警醒社, 203頁。
- 16) 賀川豊彦 (1949) 「序」『南十字を望みて』新教出版, 1頁。戒能信生 (2012) 「深田種嗣」『宗教部日誌』①校訂・解題『賀川豊彦研究』第58号, 87頁。
- 17) 瀬川和雄編 (記載なし) *Kobokan "Door of Hope"*—20周年誌英文タイプ第1稿』社会福祉法人興望館, 4頁。
- 18) 前掲書26頁, 「賀川豊彦氏の産業青年会への土地貸与」には「その拠点となる土地を、東京府の仲介で焼失した松倉町の興望館所収地とし、その一部を借用して活動を始めた」と記されている。両者の文献内容に食い違いがみられる。
- 19) 前掲書26頁。
- 20) 斎藤実氏とのインタビューにより「可能性がある」との確認をした。1923年12月29日の理事会においては「本所松倉町基督教産業青年会に関する報告を荒川、石田両主事より開陳するところあり次回の臨時理事会で提出すること」の記録がある。木立日誌『神のらっぱの吹ける時』には、木立が12年度の会計報告、事業報告を「書き上げなくてはならぬ」と時間に追われながら作成している。(1月4日、5日記録が見られた) 時期的にも整合している。
- 21) 本所基督教産業青年会 (1924) 『大正一三年一月本所基督教産業青年会事業概況』本所基督教産業青年会, 1-12頁。
- 22) 前掲書216頁。
- 23) 前掲書87頁。10月19日の開設日の夜は、イエスの友会の路傍伝道地は青山郵便局、師範学校および明治神宮参道の3ヶ所で、伝道隊のメンバーは、石田友治、後藤安太

郎、馬淵康彦、深田種嗣、根岸、加藤和根、菊池千歳、中村、松井勝三郎、松井（かつ）10名であった。

- ²⁴⁾ 前掲書98頁。
- ²⁵⁾ 前掲書114頁。深田は、賀川から「来春4月から神学校に入りなさい」と言われていた。
- ²⁶⁾ 戒能信生「第20回全国ボランティアフェスティバル分科会講演『賀川豊彦と関東大震災』」『賀川豊彦研究』第58号、62頁。2012年戒能作成による「関東大震災と賀川豊彦（執筆一覧）」表Ⅱから賀川の執筆状況を分析した。それによると、1923年9月～1924年7月までの11カ月間の平均執筆数32.7冊と驚異的な執筆数であることを知ることができるだろう。
- ²⁷⁾ 前掲書105-106頁。
- ²⁸⁾ 前掲書112頁。1925年3月31日の日誌の主事会の議事3「玄関を明けざる様に、玄関諸当番を定こと」とあり当番表月曜日から日曜日の午後、夜の当番とが決められていた。
- ²⁹⁾ 前掲書118頁。
- ³⁰⁾ 本所基督教産業青年会（1924）『大正一三年四月本所基督教産業青年会設立趣旨』本所基督教産業青年会、頁の記載なし。
- ³¹⁾ 前掲書100頁。『本所基督教産業青年会庶務日誌』の1924年12月11日（水）の日誌に初めてミス・ブラックモアの名前が登場してくる。この日の午後6時から青年会、診療所、興望館を招いて夕食会、感謝祈祷会が持たれていた。庶務部の木立がミス・ブラックモアに興望館の坪数を訪ねていた。1925年5月5日の日誌には、「本会土地の件につき、Blackmore氏へ借用延期を願い出たるに、差しあたり、差支へなき回答ありたり」と記録されていた。同117頁。

参考文献

- 雨宮栄一（1985）「関東大震災と賀川豊彦」『賀川豊彦研究』第89号、13-19。
- 雨宮栄一（2006）『貧しき人々と賀川豊彦』新教出版社。
- イエスの友会編（1990）『火の柱』全4巻緑蔭書房。
- 伊丹謙太郎（2016）「関東大震復興における賀川豊彦とその同労者の取り組みに見る地域形成の視座の検討」『全労災シリーズ』第63号。
- 大里知子（1992）「賀川豊彦のセツルメント運動(I)－本所基督教産業青年会を中心として」『賀川豊彦研究』第23号、2-15。
- 大里知子（1992）「賀川豊彦のセツルメント運動(II)－本所基督教産業青年会を中心として」『賀川豊彦研究』第24号、2-22。
- 賀川豊彦（1962-64）『賀川豊彦全集』全24巻キリスト教新聞社。
- 賀川豊彦（1924）「関東大震災救護運動を顧みて」『太陽』9月号、215-219。
- 賀川豊彦（1927）「セツルメント運動の理論と実際」『社会事業研究』第4巻3号、1-24。
- 賀川豊彦（1926）「欧米のセツルメントに就いて」『社会事業』第10巻第1号、69-72。
- 賀川豊彦（1928）「社会事業と宗教運動」『社会事業研究』第16巻第5号、21-27。
- 賀川豊彦個人雑誌（1989-1927）『雲の柱』第1巻～第6巻 緑蔭書房。
- 賀川豊彦記念松沢資料館（2011）『日本のキリスト教史における賀川豊彦—その思想と実践』新教出版。
- 賀川純基（2005）「賀川豊彦の視野」『賀川豊彦学会論叢』第13号、79-145。
- 戒能信生（2012）「深田種嗣『宗教部日誌』①校訂・解題」『賀川豊彦研究』第58号、85-115。

- 戒能信生 (2013) 「深田種嗣『宗教部日誌』②校訂・解題』『賀川豊彦研究』第59号, 80-105.
- 戒能信生 (2014) 「資料『本所基督教産業青年会庶務日誌』①校訂・解題』『賀川豊彦研究』第60号, 91-118.
- 戒能信生 (2015) 「『本所基督教産業青年会庶務日誌』②校訂・解題』『賀川豊彦研究』第62・63合併号, 119-144.
- 戒能信生 (2015) 「木立義道『凡人記』解説・校訂』『賀川豊彦研究』第62・63合併号, 145-161.
- 戒能信生 (2015) 「本所基督教産業青年会の土地について資料とメモ』『賀川豊彦研究』63合併号, 172-179.
- 『カナダ婦人宣教師物語』編集委員会 (2019) 『カナダ婦人宣教師物語』学校法人東洋英和女学院.
- 木立義道 (1929) 「私営社会事業の行詰りと其の転向策としての協同組合化』『社会事業』第12巻第10号.
- 木立義道 (1928) 「人民殿堂の建築—本所基督教青年会の近況』『火の柱』第19号, 6.
- 木原活信 (1998) 『J.アダムスの社会福祉実践思想の研究』川島書店.
- 興望館創立75周年記念誌編集委員会 (1995) 『興望館創立75年の歴史』社会福祉法人興望館.
- 神戸 YMCA100年史編集室 (1987) 『神戸とYMCA100年』神戸キリスト教青年会.
- 斎藤実 (1980) 『東京キリスト教青年会百年史』東京キリスト教青年会.
- 斎藤実 (2010) 『東京YMCA130年の歩み』東京YMCA.
- 杉山博昭 (2015) 『「地方」の実践からみた日本キリスト教社会福祉』ミネルヴァ書房.
- 瀬川和雄編 (記載なし) *Kobokan "Door of Hope"—20周年英文タイプ第1稿* 社会福祉法人興望館, 1-59.
- 武内勝口述 (1973) 『賀川豊彦とボランティア』武内勝口述刊行委員会.
- 東洋英和女学院百周年史実行委員会 (1984) 『東洋英和女学院百年史』東洋英和女学院.
- 東京基督教青年会 (1923) 『大正拾貳年九月理事會記録』東京基督教青年会.
- 並木浩一 (2014) 「賀川豊彦『苦難に対する態度』の成立と特色』『賀川豊彦学会論叢』第22号, 1-38.
- 日本キリスト教婦人矯風会編 (1986) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版.
- 日本基督教団東駒形教会 (2013) 『続・雲のような証人たち—東駒形教会90年記念誌』日本基督教団東駒形教会.
- 東駒形教会七〇年史編集委員会 (1993) 『日本基督教団東駒形教会七〇年史』日本基督教団東駒形教会.
- 藤沢真理子 (2018) 「賀川豊彦と関東大震災—100年続く復興支援』『東邦学誌』第47巻第2号, 15-32.
- 本所賀川記念館編集委員会 (2009) 『本所賀川記念館四〇年の歩み』財団法人賀川記念館.
- 翻訳高見ひづる (記載なし) 『*Kobokan "Door of Hope"—興望館1919年~1939年通史*』社会福祉法人興望館.
- 本所基督教産業青年会 (1924) 『大正一三年一月本所基督教産業青年会事業概況』本所基督教産業青年会.
- 本所基督教産業青年会 (1924) 『大正一三年四月本所基督教産業青年会設立趣旨』本所基督教産業青年会.
- 本所基督教産業青年会 (1925) 『IYMCA本所基督教産業青年会事業報告大正十三年度』本所基督教産業青年会.

- 武藤富雄（1981）『評伝賀川豊彦』キリスト教新聞社。
山本邦之助（1949）『南十字を望みて』新教出版。
四十年史編集委員会（1965）『四十年の恵み』キリスト教新聞社。
吉田久一（1999）『日本の社会福祉思想』。
横山春一（1959）『賀川豊彦伝』警醒社。
李善恵（2017）『賀川豊彦の社会福祉実践と思想が韓国に与えた影響とは何か』ミネル
ヴァ書房。
ロバート・シエルジェン（2007）『賀川豊彦—愛と社会正義を求めた生涯』新教出版。